

一般演題

1. 原発性肺癌の Perfusion scan による検討

。藤原 寿則 渡辺 紀昭
長瀬 正彦 河原 良英
(徳島大・放)

原発性肺癌48例について、肺シンチグラムにより定量的に血流量を求め、肺癌における肺動脈血流障害および血流障害の程度と予後との関係を検討した。

対象とした48例の平均の患側肺動脈血流量は正常者の47%であった。肺門型(36例)の平均肺動脈血流量は39%、肺野型(10例)では72%であった。肺動脈血流量は肺癌の組織像別では差を認めなかった。臨床病期と血流障害は相関し、第Ⅰ、Ⅱ期症例では第Ⅲ期、第Ⅳ期の症例に比し血流障害は軽度であった。

放射線治療開始時の肺動脈血流50%以上の症例では、50%以下の症例に比し平均生存月数、1年生存率ともに良好であった。治療開始時の肺動脈血流障害の程度が予後に関する重要な因子の1つと考えられる。

2. 肺疾患に対する放射性エロゾール吸入シンチグラムの検討

。佐々木正博 児玉 求 勝田 静知
(広島大・放)
福原 典昭 宮庄 英明 神辺 真之
(広島大・2内)

諸種肺疾患(びまん性汎細気管支炎6例、肺線維症5例、気管支喘息4例、慢性肺気腫3例、慢性気管支炎2例、原発性肺癌10例、その他4例で合計34例)に対して ^{99m}Tc -albuminをエロゾール化した後、吸入肺シンチグラフィを行い、肺内の吸入分布を検討した。吸入シンチグラムを肺野均

等型、中心型、肺野不均等型、後2者を合わせた混合型の4型に分類した。諸種肺疾患の吸入シンチグラムの特徴的パターンは、気管支喘息、慢性肺気腫では中心型、あるいは混合型を示し、びまん性汎細気管支炎では不均等型であるが、気管・肺野末梢部にエロゾールの沈着がみられない。肺線維症は蜂窩肺のない症例では肺血流、吸入シンチグラムともほぼ均等型を示した。肺癌のうち中枢部に発生した症例は著明な分布異常を呈し、一部の症例に病巣中枢側に集積をみた。中心型あるいは混合型を示す吸入シンチグラムは一秒率の低下、吸収抵抗ならびに残気率の増加とよく相関した。

3. 心放射図における C_2/C_1 とシャント量の相関について

。水川帰一郎 玉井 豊理 田辺 正忠
江原 一彦 平木 祥夫 青野 要
山本 道夫

(岡山大・放)

ローゼンタールなどは心放射図における C_2/C_1 がシャントの診断に有用であることを報告している。今回私どもは左→右シャント量と ^{99m}Tc -HSAによる心放射図の C_2/C_1 との間に一次関係を仮定し、一次式とその相関係数を求めた。疾患群はASD 6例、VSD 6例である。相関係数は、ASDでは右心、左心、肺動脈でそれぞれ0.70, 0.80, 0.78となりよく相関していた。ところがVSDではそれぞれ0.57, 0.07, 0.71と肺動脈以外ではよい相関がみられなかった。これはVSDの6例がいずれも5歳以上でシャントが小さいことに起因している。

なお右心カテーテルによるシャント率については岡大第2外科の御好意による。